「幼保小の円滑な架け橋」
～垣根を越えた遊びと学びの連続性を生み出す体制構築の取組～

加茂市教育委員会　廣野 達也（H15・一期一会・新しい風）

1　問題意識と取組の背景

「小1プロブレム」が課題として表面化する以前から、園と小学校間のギャップ・段差は存在していた。これまで5歳児に小学校へのスムーズな移行を意識して園側が取り組む「アプローチカリキュラム」や、小学校に入学したばかりの１年生の初期に、幼児期と学齢期をスムーズにつなぐために学校側が取り組む「スタートカリキュラム」等、園と学校現場では様々な取り組みがなされてきた。

令和４年３月、中央教育審議会 初等中等教育分科会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」において、5歳児から小1の2年間をひと続きの『架け橋期』として捉え、全ての子どもが格差なく生涯にわたる「学びや生活の基盤」を身に付けられるよう、幼保小が一体となって教育の内容や方法を改善することがより一層求められた。

加茂市では、加茂市保育会に所属するこども園・保育園が中心となり、40年以上前から「年長児交歓会」が行われてきた。所属の違う子ども達が一緒に遊び、交流活動を通して同じ年代の子ども達のふれあいを生み出す活動として実施されてきた。共に活動することを目的とし、長年親しまれてきた本事業は、園同士の連携から生み出された、無くてはならない取り組みの一つとして定着してきた。しかし、参加する園は限定的であり、時代のニーズに併せた活動の在り方や運営方法等には、課題感があった。

また、行政側の課題として、幼児期と学齢期をつなぐ取り組みや園・学校へのアプローチ等、本格的な体制づくりが求められてきた。さらに、庁内の各課を越えた体制として、幼児期から学齢期の子ども達の「発育と発達」「保育と教育」のシームレスな取組や情報共有、協議・協働には課題があった。
令和４年度に指導主事が配置され、学校と行政をつなぐ架け橋としての役割を担ってきた。その一つが、架け橋期の教育や就学に関する取組である。幼児期の「遊びを通じた学び」と、小学校の「教科等の学び」の間にあるギャップ・段差を緩やかにし、子どもの育ちを切れ目なく支えるため、行政主導による改善が必要であった。

これらのことを踏まえ、「円滑な接続」を目的として、学校教育課とこども未来課、社会教育課が互いに緊密に連携し、5歳児から小学1年生までの「遊びと学びの連続性」を保証するための体制構築を行ってきた。特に「年長児交歓会」を市主催「年長児交流会」の事業へと発展させ、それを架け橋期のカリキュラムの具体的な実践の場として位置づけた。さらに、架け橋期の子ども達の円滑な接続を目的として、行政の立場で、園と学校が「組織や文化の壁」を越えて学び合うことができるよう、保育・教育について協議のできる縦と横の枠組みを提供し支援してきた。

この取組から、園を越えた幼児期の横のつながりと、園・校種を越えた縦のつながりを構築することで、物理的な垣根を越えた子ども同士のつながりと、大人の連携・協働の「架け橋」を創出することができつつある。

2　取組の実際

(1)取組Ⅰ

a. 計画

・「年長児交流会」の開催

b.経緯

・これまで加茂市では、加茂市保育会に所属する園が主催の「年長児交歓会」が数十年にも渡って実施されてきた。令和4年度、指導主事が園訪問を行っている中で、保育会に所属していない市内園の園長からの「参加希望」を受け、加茂市保育会に打診することとした。また保育会からは同時進行で、これまでの取組に対する課題感の共有を受け、市が主導する体制構築に着手した。

c.取組概要

【令和4年度】
・市教育委員会及び市子ども未来課職員の、「年長児交歓会」への参加

【令和5年度】
・保育会と市（教育委員会学校教育課 及び 加茂市子ども未来課）の共同開催
・市：打合せ会の主催
・保育会 5歳児部会 メンバー＋アドバイザー※：打合せ会への参加
（※架け橋期コーディネーター育成の検討）

【令和6年度】
・市主催事業へと移行
・保護者参観の導入

【令和7年度】
・「自由遊び時間」の確保　・学校職員参観の導入
・他課への協力依頼　・小学校統合を意識した交流形態の工夫

【令和8年度】
・打合せ会のスリム化（回数の削減）
・公民館事業との連携（開催日の変更・場の設定）

d.取組の実際

・令和8年度のプログラム及び会場図

9:00～	開館・各園来場 環境・場の設置 **自由遊び ゾーン** （※対応、市職員） ◇段ボール・ブロック積み ◇段ボールキャタピラ ◇風船遊び ◇お絵描き壁画・床 ◇制作・活動ひろば
10:00～	開会式　・教育長あいさつ ・園紹介　・体操ダンス　・〇×クイズ
10:20～	**①「猛獣狩りに行こうよ！」** **＋②名刺交換ゲーム** ・ステージ側（石川小・須田小・下条小） ・出入口側（加茂南小・加茂小・七谷小＋α） **③追加ゲーム**「リレー」（※時間に応じて）
11:15～	閉会式　・歌
	清掃・片付け
11:30	終了・解散

図1　令和8年度 プログラム

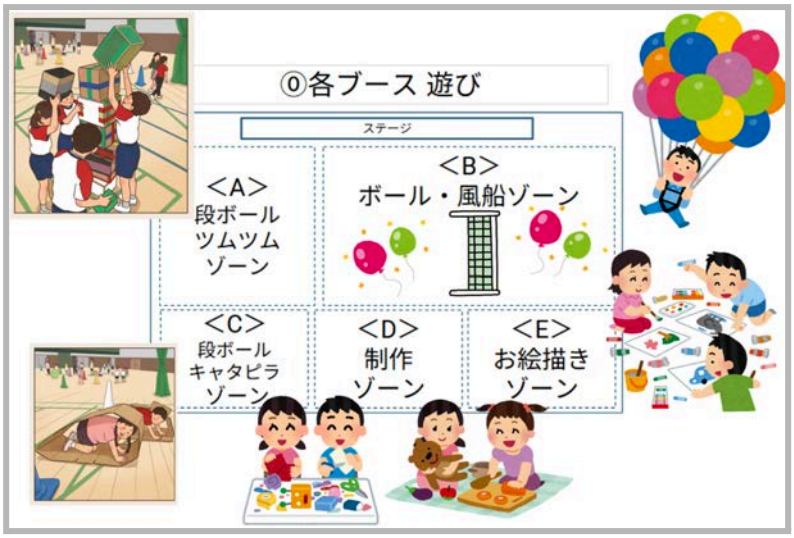


図2　令和8年度 会場図

・令和8年度「保護者への周知」



図3 令和8年度 保護者周知チラシ「ご案内」



図4 令和8年度 保護者周知チラシ「家族向け動画」

・令和8年度「当日の様子」









e.成果と課題

〇長年の継続的な取り組みである交流から「質的な遊びと学び」へのシフト

〇当日のみの「お楽しみイベント」的行事から、就学を意識した行事とすることで、当日を迎　える までの準備期間及び当日、そしてその先の就学時健康診断や小学校入学の意識の醸成を　図ること ができた。

〇園を越えた大人が連携し、交流会を通した子どもの様子から幼児理解を深めることができた。

▲年長児と小学１年生の交流機会の確保等、園と学校とをつなぐイベントの開催を通し、年長児同士の交流に留まらない「架け橋期」の広がりの必要性が課題として上げられた。

▲市内園・学校の先生方の、園校種を越えた、相互理解の不足や指導方法・環境等のギャップが表出された。

→このことから、「架け橋期のカリキュラム開発」のより一層の必要性が見えてきた。

(2)取組Ⅱ

a. 計画

・「架け橋期のカリキュラム開発会議」の開催

b.経緯

・これまで現場では、「アプローチカリキュラム」・「スタートカリキュラム」として実践を　積み重ねてきたが、現場の努力に任せる限界や、担当者個人への負荷等の課題が明確になっ　てきていた。その課題を解消するため、自治体がバックアップし持続可能で効果的な環境を　整えるため、市が主導したカリキュラム開発会議を設定した。

【ポイント】

①単なる「交流活動」や、「担当者任せ」からの脱却

・従来の連携は、学校探検や限定的な交流活動、個別の情報の引継ぎにとどまりがちで、資質・能力をつなぐ本格的なカリキュラム編成には至らないケースが見られた。　また、担当者の意識や力量への負荷が大きく、形骸化してしまう課題もあった。

これまでの各園や学校での良い取組は残しつつ、加茂市全体での取り組みや学校統合も見据えたカリキュラム開発が必要であった。

②複雑な「就学パターン」への対応

・１つの園から複数の小学校へ子どもが進学し、１つの小学校も多数の園（公私立・幼稚園・こども園）から子どもを受け入れることが当市でも多い。各小学校区での取組　は大事であるが、物理的な限界もあるため、自治体がハブとなり、共通の枠組みをつ　くる必要があった。

③現場の「負担軽減」と「孤立防止」のための行政支援

・コロナ禍における接続の中断や「小１ギャップ」等の課題に直面する中、現場だけに責任や作業を押し付けるのではなく、自治体が研修の機会提供やコーディネーターの　配置、大まかなカリキュラムの土台整備を行うことで、現場がゼロから悩む負担を減　らし「子どもの学びのつながり」に向けた対話や実践に集中できるようなサポートの　必要性が年々増加してきた。

c.取組概要

【令和6年度】

・「第１回架け橋期のカリキュラム開発会議・研修会」の開催
・管理職及び実務者の参加を可能とした研修会
・市内全園及び小学校（中学校）への周知

【令和7年度】

・年間を通した「架け橋期のカリキュラム開発会議」の開催
・８月、10月、12月の開催
・令和７年度版「加茂市 架け橋期のカリキュラム」完成
・各園及び小学校のカリキュラムへの反映

【令和8年度】

・年間を通した「架け橋期のカリキュラム開発会議」の開催
・事前アンケート、８月、12月の開催（業務負担の軽減）
・カリキュラムの見直し改善を図る。
・新潟県架け橋センター事業の実施に併せた、公開授業・研修会の開催

d.取組の実際

【令和6年度】まで



図5 これまでの取組と、令和6年度末「合同研修会」の様子

【令和7年度】

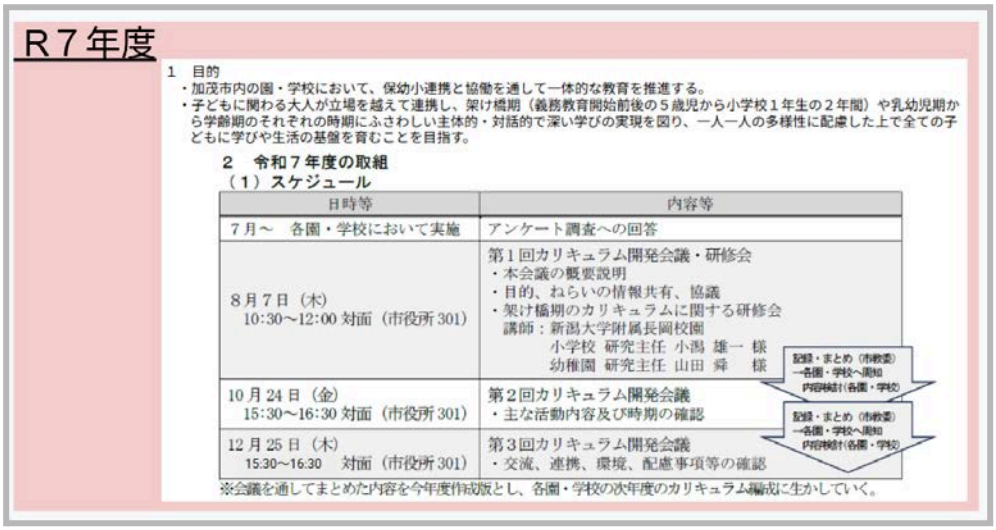




図6　令和7年度の取組と研修会の様子

【令和8年度】



図7　令和8年度の公開授業・研修会について

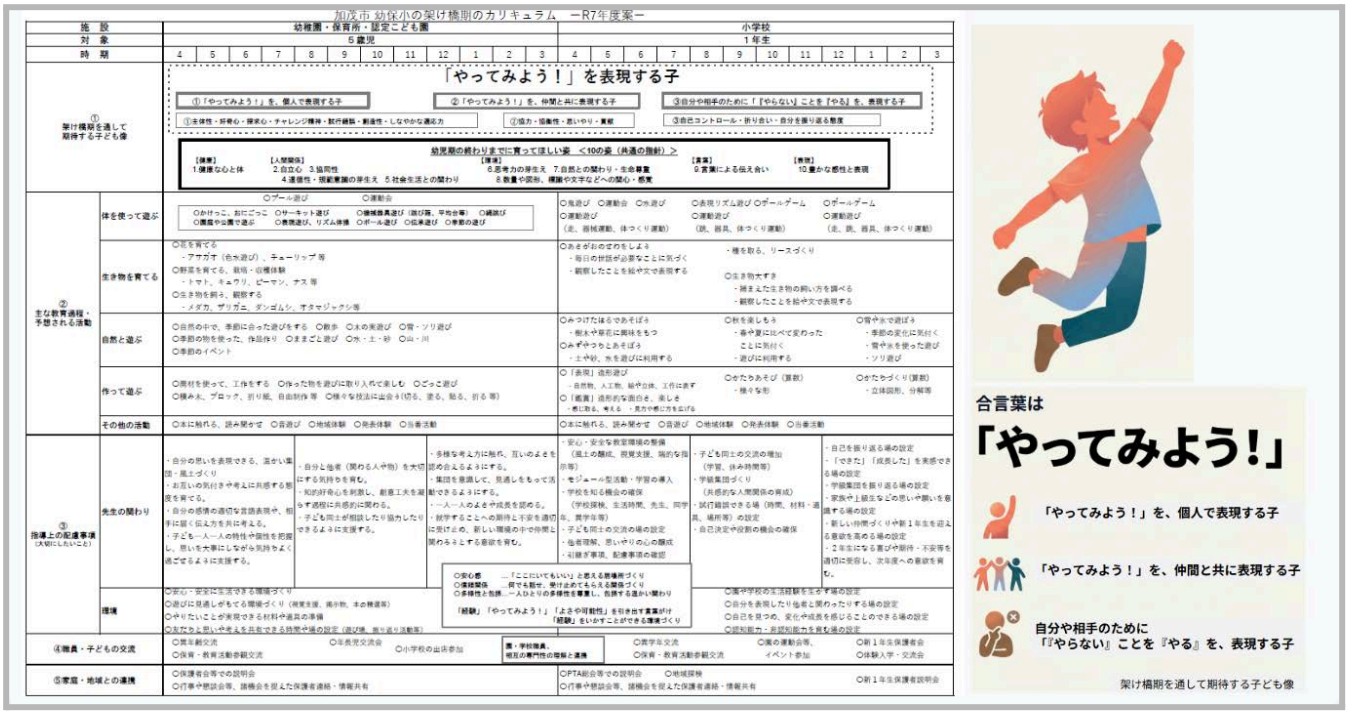


図8　令和8年度「架け橋期のカリキュラム」

e.成果と課題

○「架け橋の遊びと学び」の意識の醸成

令和8年度春の市内園・小学校の意識調査において、全園及び小学校（100%）が、「接続　　や学び方を指揮して取り組んでいる」と、回答するに至った。

・・・縦のつながり

○相互参観・公開保育授業の活性化による相互理解の促進

行政による日程の集約・共通システムにより、園と学校とが相互の保育教育活動を意識して見合い、指導方法等の違いや共通点を理解する文化の土台ができつつある。

○年長児の子どもの、小学校入学に向けた期待感の醸成

交流活動において、自由遊びや共通の遊び、「名刺交換」等を取り入れた交流活動を通じ、　　当日だけではない、子どもたちが小学校に入学に向けた「ワクワク・ドキドキ」とした前向　　きな期待を年間カリキュラムに位置付けることができた。

▲小学校区、施設間における温度差の解消

市全体のカリキュラムの共通理解を図ってきたが、取組状況や熱量に地域差・園校差が見られる。個別の状況を考慮した所管課との連携やフォローアップが必要である。

▲実践手順・好事例の具体化とニーズへの対応

「実際に何をどのように進めるのか」といった声が現場からは上がっている。研修の機会等　　を通して、より具体的で実践的な好事例の共有が求められている。

▲持続可能な体制の構築とカリキュラムの定着

各所属職員の異動や多忙化に影響されないよう、「一定の加茂市版カリキュラム」とし　　て構造化・明文化し、市の教育文化として定着させることが今後の課題である。

(3)取組Ⅲ（その他の取組）

・「園・学校間-研修会（相互参観）」の機会の促進

Googleカレンダーやスプレッドシートによる公開保育・授業情報の全市共有を標準化し、周知と校種を越えた相互理解を図った。

市内学校統廃合も見据え、幼保小中連携と協働を通した一体的な教育の推進を図ることをねらいとしてきた。

子どもに関わる大人が校種と立場を越えて連携し、架け橋期から学齢期のそれぞれの時期に相応しい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で、全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことを、今後も目指していく。

・「年長児参観」「年中児巡回相談」の課を越えた連携事業

学校教育課主観「年長児参観」、子ども未来課「年中児巡回相談」を連携事業とすべく、調整を図ってきた。幼児期から学齢期に係るため、学校教育課・こども未来課が協力してチームによる関わりを実施してきた。

指導主事、公認心理師、保健師、家庭児童相談員等の多職種が連携し、事業だけでなく、具体的な就学支援や教育相談等にも関わってきた。このことにより、就学前に個別の発達特性や教育的ニーズの把握を、行政と園が早期に情報共有し小学校へのスムーズな引継ぎを図ってきた。

「5歳児健診」等の開催も含め、今後さらに課を越えた連携が必要となってくる。

3　まとめ（成果と課題、今後の展望）

行政として、園と学校が「組織や文化の壁」を越えて協働できるよう、物理的な場と協働的に保育・教育を協議等できる枠組みを提供してきた。

複数年間の取り組みを通じ、幼保小の接続は「形式的・形骸化した行事」から質的にブラッシュアップさせた現代の時代ニーズに沿った教育活動へと進化してきた。接続に対する意識は大きく向上したが、それと同時に深化のための課題も明確になってきた。

成果	課題
・加茂市版「架け橋期のカリキュラム」の作成 ・市内全園との協働体制の構築 ・「交流活動」のねらいと価値の転換 ・共通のビジョンの浸透 ・相互参観の活発化	・現場間の温度差 ・具体化へのニーズ ・学区の好事例の創出 ・架け橋期のコーディネーターの育成と協働 ・保護者や地域住民を含む活動への展開 ・持続可能な体制維持「幼保小中連携」

（1）成果：行政主導の部局横断と「学社連携」による基盤づくり

当市における「架け橋」づくりは、園・学校・庁内（学校教育課×社会教育課×こども未来課）の縦割り事業の改善にとどまらず、家庭や地域社会を巻き込むことを念頭にした包摂的な教育体制・社会連携・協働体制の構築を目指してきた。

「年長児交流会」の市主催化や保護者参観の導入、ITツールを活用した公開保育・授業情報の全市共有などにより、園・学校間の相互理解のみならず「地域・家庭と共に子どもの育ちを支える文化」の土台づくりに取り組んできた。

令和8年度の意識調査で全市園・学校の100%が「接続や学び方を意識している」と回答したことは、行政・学校・地域社会が一体となって学びの連続性を支える基盤が整いつつあることを示している。

（2）課題と展望：地域社会と共につなぐ持続可能な「加茂市モデル」へ

今後は、園・学校・地域ごとの意識や取組の「温度差」を解消し、この取組を単なる学校教育　の枠組みを超えた「地域ぐるみの持続可能な教育文化」へ向上させることが課題である。

1. 家庭・地域との協働推進
   保護者や地域住民に対し、「遊びを通じた学び」の価値や接続の意図をわかりやすく可視化・発信し、地域全体で子どもの主体性とウェルビーイング（幸せ）を育む環境を整備する。
2. 幼保小中連携・まちづくりを見据えた持続可能な体制構築
   幼保小中連携や学校統廃合、コミュニティ・スクール等も見据え、幼保小中から地域社会へとつながる学びの連続性を明文化・構造化し、人事異動等に左右されない「加茂市版カリキュラム」として定着させる。

行政として、「現場と地域に寄り添う伴走者」として、管理面だけでなく、園・学校・家庭・地域の対話と協働を支え、これらの成果と課題を踏まえ「加茂市版カリキュラム」の改善と、その先にある子どもたちの輝く未来と地域社会の創出に向けた取組を継続していく。